

キー・コンピテンシーを育む向東型授業の開発

～『葛藤場面』の設定を通して～

1 研究の背景

(1) 研究の背景

本研究は、広島版「学びの変革」アクション・プランを受け、キー・コンピテンシーの育成を目指した主体的・協同的な学びの充実を図るために設定したものである。

キー・コンピテンシーは、

- 1 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力（個人と社会との相互関係）
- 2 多様な社会グループにおける人間関係形成能力（自己と他者との相互関係）
- 3 自律的に行動する能力（個人の自律性と主体性）

という3つの能力に分類されるが、本校の研究では次のように再定義したい。

①相互作用的に道具（ツール）を用いるとは

- ・新たに提示された問題解決に既習事項を生かすことのできる能力
- ・問題解決に必要な対話の手段（表現方法）を適切に選択・駆使することのできる能力
- ・問題解決に必要な道具やスキルを適切に選択・駆使することのできる能力

②異質な集団で交流するとは

- ・他者と協力することのできる能力
- ・異なる考えを持つ他者と対話し、自他の考えを吟味できる能力
- ・対立を解決に向け対処することのできる能力

③自律的に活動するとは

- ・協働的な学びの中で、自らがどのように参画すればよいかを判断し、行動できる能力
- ・問題解決の場面において、どのように考え、動けばよいかを自分で判断し、行動できる能力

2 研究主題設定の理由

さて、本研究が着目したのが、授業における「『葛藤場面』の設定」である。授業の中で、ある程度の知識を習得した後に、「あれ？どっちなんだろう」「自分はこう思うんだけど」「違う考えの人もたくさんいるようだ」「本当はどうなのかをみんなで考えたい」という葛藤場面を含んだ学びのプロセスを教師が意図的に設定するのである。

このような葛藤が生まれる学びのプロセスを設定することにより、①相互作用的に道具を用いる力、②社会的な異質な集団で交流する力③自律的に活動する力といった「キー・コンピテンシー」を育めると考えた。そこで、本研究の研究主題を

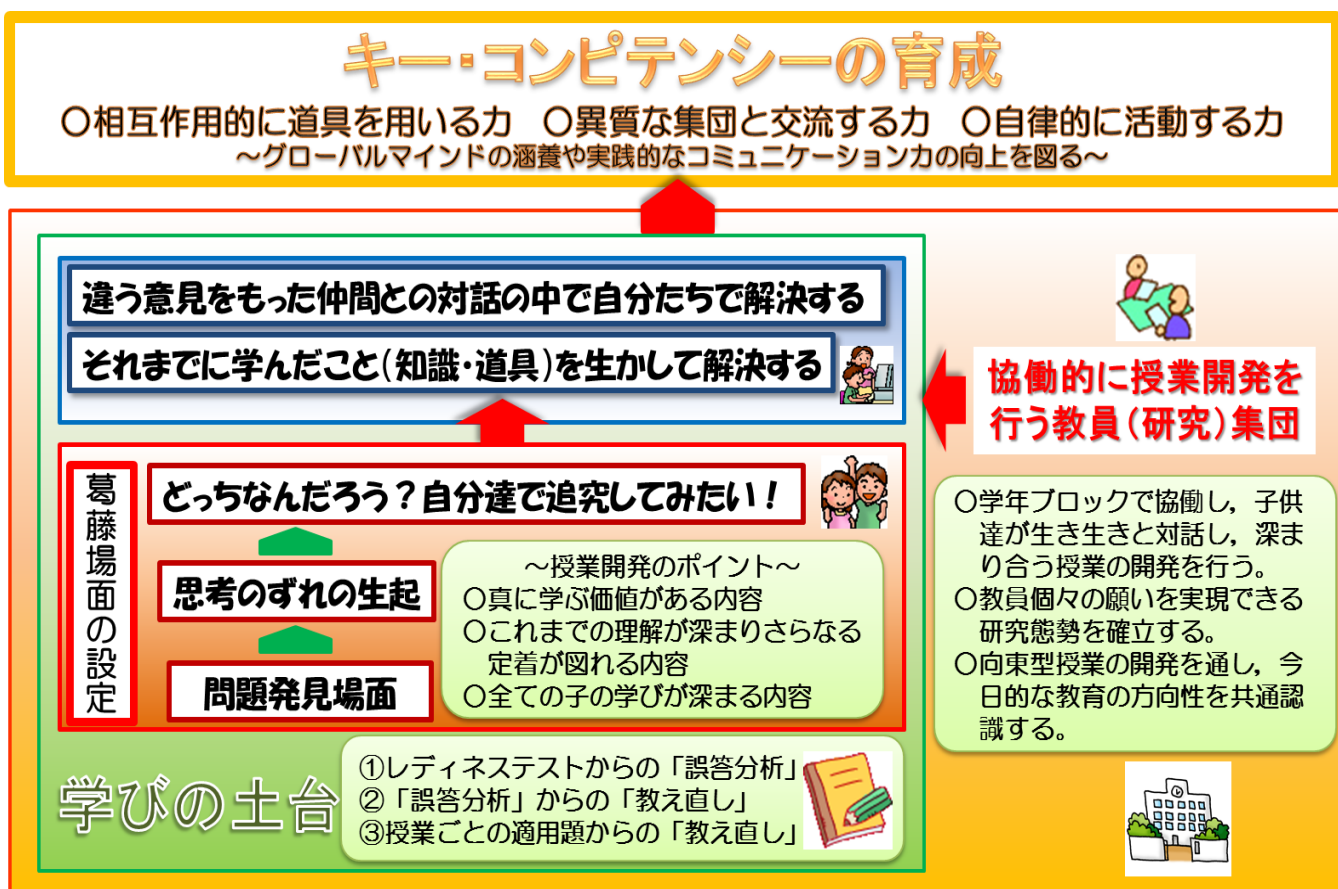
キー・コンピテンシーを育む向東型授業の開発

～「葛藤場面」の設定を通して～

と設定した。

3 キー・コンピテンシーを育む向東型授業

《研究構想図》



低学年	○基礎的な学力を定着させると共に、わかったことを相手に伝える力の育成を重視する。
中学年	○低学年の内容を引き継ぐと同時に、学習課題を共有し、全体を意識した対話のある授業展開を重視する。また後期になるに従い、上の図で目指す子どもの姿に近づく授業展開を重視する。
高学年	○上の図にあるような子どもの姿が生起する授業展開を重視する。
特別支援	○視覚的支援を中心に、障害種に応じた理解を促す指導法を開発する（授業のユニバーサルデザイン化）

4 検証の方法

向東型授業がキー・コンピテンシーを育むことができたかどうかを検証するために、授業開発と同様、キー・コンピテンシー測定尺度についても、文献調査及び検証手法の開発を行いたい。現在さまざまなキー・コンピテンシー測定尺度について提唱されているが、本校の授業及びめざす子供の姿が生起していたかをとることができる適切な測定尺度を用い、単元の始まりと終わり、あるいは学年の始まりと終わり等における変容を検討し、検証を行う。また、研究者集団の質の高まりにも着目し、キー・コンピテンシー育成についての理解度や、授業開発についての達成度について検証したり、日常の実践について評価を行ったりするなどして、向東型授業の発展向上に生かしたい。